

西藏文佛說大無量壽經 (承前)

寺本婉雅譯

(5) 是の如く告げ給ひしとき、長老阿難陀は世尊に斯く問へり。世尊よ、云何にあるや。彼法藏大菩薩は無上清淨圓滿の菩提を現かに成就せる覺者にして、無餘涅槃したまへるか、或は現かに成就せる覺者にまで無餘涅槃したまはざるか、或は現に今出で、現かに成就せる覺者となりて、今住し生活し留りて又法を説き給ふや。世尊は曰、阿難陀よ、彼如來は又過ぎ給ひしにもあらず、又未だ來り給はざるにもあらず、されど彼如來は(以下原本二八五左)無上清淨圓滿の菩提を現かに成就せる覺者となりて、今住し、生活し、留りて又法を説き給ひ、是れより西方百千俱胝尼由他の安樂佛國に於て如來應供正等無量光佛と名けられ、無量の大菩薩と無邊の聲聞等に全て圍繞せられ、前に整列し、無邊圓滿なる佛國を有し給ふ。

(6) 彼(如來)の光は無量にして、佛(如來)は此數の佛國と、此數百の佛國と、此數千の佛國と、此數百千の佛國と、此數俱胝の佛國と、此數百俱胝の佛國と、此數千俱胝の佛國と、此數百千俱胝の佛國と、此數百千俱胝尼由他の佛國とを覆ひ給ひてありと云へる(光明の)限量は知るべく容易なら

す。されど阿難陀よ、略して教示せば、東方に於て百千俱胝尼由他恒河沙量の佛國を彼無量光世尊は光明を以て常に覆ひ給ふ。是の如く、南と西と、北と下と上と各四方に於ける百千俱胝尼由他恒河沙量の佛國を彼世尊無量光如來は光明を以て常に覆ひ給ひて、諸佛世尊の宿願に由る加被力に依て一尋、二尋、三、四、五、十、二十、三十、四十、五十、及び十由旬那の光、百由旬那の光、千由旬那の光、百千由旬那の光より、百千俱胝尼由他由旬那に至るまでの光明を以て世界を覆ひ給ふ覺者（住者）を除くなり。阿難陀よ、云何なる譬に依るも、彼の世尊無量光如來の光明の量を取持する譬の定むべきなし。

7) 阿難陀よ、この法門に由て彼如來を⁽¹⁾無量光と名けられ、⁽²⁾無量光（明）、⁽³⁾無量耀、⁽⁴⁾無達光、⁽⁵⁾無愛光、⁽⁶⁾無着光、⁽⁷⁾常放光、⁽⁸⁾天珠光、⁽⁹⁾無礙照王光、⁽¹⁰⁾可愛着光、⁽¹¹⁾可喜光、⁽¹²⁾可上喜光、⁽¹³⁾可滿足光、⁽¹⁴⁾可見光、⁽¹⁵⁾可結光、⁽¹⁶⁾不可思議光、⁽¹⁷⁾無等光、⁽¹⁸⁾超人王天王光、⁽¹⁹⁾閉日月令闇光、⁽²⁰⁾超護世釋羅梵淨居大自一切天令闇光と（號す）。要略せば到一切光彼岸と名づけらるなり。

(8) 彼光とは清淨廣大にして身に樂を起し、心歡ひ、天、阿修羅、龍、夜叉、乾闥婆、伽樓茶、摩睺羅伽、緊那羅、人、非人等の歡喜と、最上歡喜と（以下原本、二八六左）、樂とを生じ、善思を有する諸有情は、善と輕と悟と解と覺と最上歡喜とを作るなり。阿難陀よ、この法門に由て他の無限無邊の諸（佛國）は、遍く如來の充滿し給ふところなり。劫波（の間は）かの無量光如來の名號（mTshan）の業因とな

り、完全なる光明を始めとして説くと雖も、名號を教示し、完全なる光明の功德の邊際を亦悟る能はざるが故に、如來の不畏も亦永久に斷せざるべし。そは何故に云ふや。阿難陀よ、是の如し、彼世尊無量充の光明の功德集と、如來の智慧と、無上辯才と、尙それと俱に無數無量にして不可思議に無邊なればなり。

(9) 阿難陀よ、かの無量光如來の聲聞の増伽は無量にして、或はこの俱胝數の聲聞と云ひ、或はこの百俱胝數の聲聞と云ひ、或はこの千俱胝數の聲聞と云ひ、或はこの百千俱胝の聲聞と云ひ、或はこの矜羯羅の數と云ひ、或はこの頻婆羅の數と云ひ、或はこの那由他、或はこの阿由陀の數と云ひ、或はこの阿閼婆の數と云ひ、或はこの毗婆訶、或はこの窣路多斯の數と云ひ、或はこの盧邪斯オーヂヤスの數と云ひ、或はこの無量の數と云ひ、或はこの無數の數と云ひ、或はこの不可計の數と或ひ、或はこの無等の數と云ひ、或はこの不可思議の數なりと云ふ、かの(聲聞)量を執持するは容易ならず。阿難陀よ、譬は是の如し、彼神通に自在を得たる目犍連比丘が(數ふること)欲せば(以下原本三八七右)、三千大千世界に於ける彼一切の星の形數をも一晝夜に數へ得るが如く、是の如き種類の神通を有するもの百千俱胝あり。彼等よりも尙數ふべからざるものあり。(そは)百千俱胝尼由他年間に無量光如來の第一會の聲聞を數ふと雖も、彼等は尙百分の一をも數ふべからず。千(分)も百千分も、譬喩も、因(分)に至るまで數ふべからず。

(10) 阿難陀よ、譬は是の如く大海の深さ八萬四千由旬あり、廣さ無量なるを或人ありて一毛を百(分)に割りし一尖を以て水の一滴を掬せんに、阿難陀よ、こは云何に思惟するや。若し一毛を百(分)に割りし一尖を以て水の一滴を掬するとき、若し(かの)大海の水集の後との残りに(於て)この兩者は何れが多きや。言く、世尊よ、若又千由旬も尙大海より少(分)ならば、一毛を百に割りし一尖を以て水の一滴を掬するに、又何ぞ説明を求めんや。世尊曰、阿難陀よ、水の一滴の如きも、世尊無量光如來の第一會の聲聞を目鍵連の如き諸比丘が百千俱胝尼由他年間數ふるとも、この量は(水滴に)同じと云へる數を以て數ふるが如し。若し大海の水の集りの後とに残りし如き數を以ては算ふべからざるが如きものあらば、尙第二(會)の聲聞、第三(會)の如きは何ぞ説明を要せんや。彼世尊の聲聞衆は是の如く無邊にして、そは無量なりと云ふ數にまで至るなり。

(11) 阿難陀よ、彼世尊無量光如來の壽量は亦量るべくもなし。或はこの幾劫波、或はこの幾百劫波、或はこの幾千劫波、或はこの幾百千俱胝劫波、或はこの幾俱胝劫波、或はこの幾百千俱胝劫波、或はこの幾百千俱胝尼由他波劫なりと云ふに至るまで、彼壽量は悟ること容易ならず。阿難陀よ、かの世尊無量光如來の身壽の量は是の如く量るべくもなし。この故にかの如來をば無量壽光と名けらるなり。

(12) 阿難陀よ、かの世尊無量光如來は無上清淨圓滿の菩提を現かに成就せる覺者となり給ひてより

應に今世界に於て劫波數と劫波を數ふる是の如き表徴の十劫を經過し給へり。

(13) 阿難陀よ、世尊無量光の樂有世界と名けらるゝは、富裕、繁榮、安樂、豐穰、喜、愛と多くの天人とに依て充滿せらるゝなり。阿難陀よ、かの世界には地獄有情なく、傍生なく、餓鬼境なく、阿修羅なく、無暇(無間)の生もなし。又かの樂有世界に輝くあらゆる諸寶は(この)世間に行はれざるなり。

(14) 阿難陀よ、樂有世界は種々の燒香と芳香とを有し、種々の華實に富み、寶樹林を以て莊嚴せられ、如來が變化し給ふ(以下原本)妙音を有する種々の群鳥は說法す。阿難陀よ、かの諸寶樹林は異色、分色、百千色あり。阿難陀よ、そは寶樹林は黄金色の如くにして黄金の自性(Rat-b-Shin)を有せり。銀色の如くにして銀の自性あり、瑠璃色の如くにして瑠璃色の自性あり、玻璃色の如くにして、玻璃の自性あり、硨磲色の如くにして硨磲の自性あり、赤眞珠色の如くにして赤眞珠の自性あり、瑪瑙色の如くにして瑪瑙の自性あり。

(15) 或は金銀の二種寶あり。又金銀、瑠璃の三種寶あり。又金、銀、瑠璃、玻璃の四種寶あり。又金、銀、瑠璃、玻璃、硨磲の五種寶あり。又金銀、瑠璃、硨磲、赤眞珠の六種寶あり。又金、銀、瑠璃、硨磲、赤眞珠、瑪瑙の七種寶あり。阿難陀よ、彼處に金の諸樹林の諸の根莖枝葉、瓣華は金の自性にして、諸果實は銀の自性なり。銀の諸樹林の諸の根莖枝葉瓣華は銀の自性にして諸果實は

瑠璃の自性なり。瑠璃の諸樹林の諸の根莖枝葉瓣華は瑠璃の自性にして、諸果實は玻璃の自性なり。玻璃の諸樹林の諸の根莖枝葉瓣華は玻璃性の自性にして、諸果實は硨磲の自性なり。硨磲の諸樹林の諸の根莖枝葉瓣華は硨磲の自性にして、諸果實は赤眞珠の自性なり。赤眞珠の諸樹林の諸の根莖枝葉瓣華は赤眞珠の自性にして、諸果實は瑪瑙の自性なり。瑪瑙の諸樹林の諸の根莖枝葉瓣華は瑪瑙の自性にして、諸果實の金の自性なり。

(16) 阿難陀よ、或樹林あり、諸根は金の自性にして、諸莖は銀の自性なり。諸枝は瑠璃の自性（にして）、諸葉は玻璃の自性。諸瓣は硨磲の自性、諸華は赤眞珠の自性、諸果實は瑪瑙の自性なり。阿難陀よ、或樹林あり、諸根は銀の自性にして、諸莖は瑠璃の自性、諸枝は玻璃の自性、諸葉は硨磲の自性、諸瓣は赤眞珠の自性、諸華は瑪瑙の自性、諸果實は金の自性なり。阿難陀よ、或樹林あり、諸根は硨磲の自性、諸枝は瑠璃の自性にして、諸莖は玻璃の自性、諸葉は赤眞珠の自性、諸瓣は瑪瑙の自性、諸果實は銀の自性なり。阿難陀よ、或樹林あり、諸根は玻璃の自性、諸枝は硨磲の自性、諸葉は赤眞珠の自性、諸瓣は瑪瑙の自性、諸果實は金の自性なり。阿難陀よ、或樹林あり、諸根は赤眞珠の自性にして、諸莖は瑪瑙の自性、諸枝は金

の自性、諸葉は銀の自性、諸瓣は瑠璃の自性、諸華は玻璃の自性、諸果實は硨磲の自性なり。阿難陀よ、或樹林あり、諸根は瑪瑙の自性にして、諸莖は金の自性、諸枝は銀の自性、諸葉は瑠璃の自性、諸瓣は玻璃の自性、諸華は硨磲の自性、諸果實は赤眞珠の自性なり。阿難陀よ、或樹林あり、諸根は七種寶の自性にして、諸莖も亦七種寶の自性、諸枝も亦七種寶の自性、諸瓣も亦七種寶の自性、諸華も亦七種寶の自性、諸果實も亦七種寶の自性なり（以下原本）
（三八九左）

阿難陀よ、それ等一切樹林は諸の根、莖、枝、葉、瓣、華、果實は柔軟にして、觸れば楽しく、芳香あり、風に搖かさるとき、それ等より聞くに愉快なる聲を發し、聞くに適し、聞くも飽くことを知らざるなり。

(17) 阿難陀よ、かの覺者の國は是の如き七種寶の諸種の樹林に充たされ、邊りには七種寶の芭蕉の莖と、多羅(樹)の行列とを以て圍繞せられ、又總て(是等の諸樹は)金網を以て覆はれ、普く七種寶の諸蓮華を以て覆はれたり。彼處に蓮華の約半由旬の量なるあり。又約(一)由旬の量なるあり。又約一、二、三、四、五由旬の量なるあり。乃至約十由旬の量なごあり。又總ての寶蓮華より三十六百億(三十六俱胝)の光明は出づるなり。又總ての光明の尖より身に金色を有し、三十二相を有する三十六百千億(三十六千俱胝)の佛は出で給ひ、彼等は東方に於ける無數無量の各諸世界に往きて、諸有情に法を説き給ふ。是の如く南西北方、上下諸方隅に於ける無數無量の各諸世界に往きて諸有

情に法を説き給ふ。

(18) 阿難陀よ、かの覺者の國中には諸黒山は決してなし(以下原本二九〇右)。一切の山は寶山のみなり、山王の一切の妙高山と、輪圍と、一切の山の王なる輪圍と、諸大海とはなきなり。彼覺者の國は普く平等喜愛にして、手掌の如く平(地)にして、地方は諸種の寶に依て方棄(散布)せられたり。

(19) 斯く告げ給ひしとき、長老阿難陀は世尊に斯く白して言く、世尊よ、妙高山の傍に住する四天王の諸天と、妙高山の頂に住する三十三天の彼等は何處に住するや。世尊は告げ給へり。阿難陀よ、是は云何に思惟するや。是は又妙高山王の上に夜魔の諸天、兜率多、化樂、他化自在、梵衆、梵輔、大梵より色究竟に至るまでの諸天に住するや。言く世尊よ。業の異熟(Las-kyi Knam)と、業の現行と(Par Smin-pa)は不可思議なり。世尊は告げて曰。阿難陀よ、業の異熟と、業の現行との不可思議を會得するに適當なるも、諸佛世尊の善と變化(神通)と、加被(力)との不可思議は誰も亦邊際、或は量證と或は思惟するに不適當なり。別に佛の國は不可思議なりと斯く審かに分別し給へり。斯の如く功德を作り喜根を起し、功德、智慧、神通、富裕と(を作りたる)不思議なる諸有情は彼佛國に生せん。(阿難陀言く)、世尊よ、我はそれについて執着或は二心、或は疑惑を有せず、我は未來の諸有情の執着、或は二心、疑惑を除滅せんが爲めに(以下原本二九〇右)、如來にこの義を全く願ふなり。世尊は告げて曰。阿難陀よ、善哉善哉、是の如きものは汝の所作なり。

(20) 阿難陀よ、かの樂有世界に種々の諸河は流れ、かしこに又廣さ約由旬那の大河あり。十、二十、三十、四十、五十由旬那に至るあり。又廣さ約百千由旬那の量ありて、深さ十二由旬那あり。それら一切の河は又芳香馥郁として種々の水となりて流れ、寶華(の)片束は流るなり。又種々異様の微妙なる音聲を有す。阿難陀よ、それらの大河より百千俱胝支を有する天の歌詠の音樂を諸巧者が奏すれば、非常の妙音を生じ、それらの大河より是の如き種類の聲の生ずるは甚深、一切所知、完全所知、非有謾、完全樂、心悅、所歡、微妙、意悅、聞不知倦、聞相應(Mān-Ba-Dai)、無常、寂靜、無我なりと聞くに楽しくて、其等一切は彼等有情の耳根に響くなり。

(21) 阿難陀よ、それらの大河の兩岸は寶香の樹林等に依りて充滿せられ、それらの種々の枝、葉、華、束は懸れり。かしこに於けるあらゆる有情は、それらの河岸に於て混亂なき天の快樂、遊戲を樂しまんと欲し、彼等はそれらの河に入るとき、欲すれば水は足蹠の殆ど没するまで住し、欲すれば膝は殆ど没し(以下原本、二九一右)、欲すれば腰は殆ど没し、欲すれば胸元は殆ど没し、欲すれば水は咽喉の没するまで住し、尙天の諸樂は生ずなり。かしこにあらゆる有情は冷(水)あれと思ひ欲せば、又彼等の爲めに冷となるべし。あらゆる(有情)は溫(水)なれと思ひ欲せば、又彼等の爲めに溫(水)となるべし。あらゆるものが冷、溫となれと思ひ欲せば、又彼等の爲めにかの水は冷、溫となりて樂しくなるべし。それらの大河は天の多摩羅(樹)の葉、阿伽爾(沈香?)、黃栴檀、蛇心栴檀、最上香

を以て塗抹(熏)せし水(原文 chos は chau の誤)は全く流滿して流れ、天の青蓮華、蓮華、黃蓮華、白蓮華、妙芳香等の華を以て覆はれ、諸の鳴く鳥は鵝鳥、白鴻、鶴、鴛鴦(原文 Ruu-Ba は Ruu の誤)、鴨、鸚鵡、水鷄(鷺鷥)、牡鷄、鳩拏羅、迦陵頻伽(Kalavinka)、孔雀等は妙音を有す。如來變化の衆鳥に依て恭敬せられ、鵝と紅鶴とに依て美飾せられ、涇々たる流れ、沼に泥土なく、金沙を散布せらる。かしこに於て何時も彼等有情は我等の是の如き欲願を全く満足せしめんと思ひ欲せば、その時彼等の是の如き諸欲願は法を具して全く満足せらるべし。

(22) 阿難陀よ、その水よりあらゆる微妙の音は出づるなり。そは覺者の彼國には一切(法を)具せる衆にまで聞ゆるなり。かしこに水を懼れて住せるあらゆる有情は、この聲をして我等の耳根に響かざらしめんと欲せば、彼等の天耳根に響かざるべし、若し是の如き種々の聲を聞かんと欲せば、是の如きかの種々の微妙の聲を聞くなり。即ち佛の聲、法の聲、僧の聲、波羅蜜多の聲、地の聲、力の聲、不畏の聲、佛不共の法の聲、神通の聲、別如實智の聲、空と、無相と、無願と、無現行と、不生と、不起と、無體と、無滅との聲、寂靜と、遠寂靜と、近寂靜との聲、大慈と、大悲と、大喜と、大捨(大等施)との聲、無生法忍と、灌頂地獲得との諸聲を聞くなり。彼は是の如き種々の聲を聞き已りて、歡喜と最上大歡喜とを得し、閑寂を有し、離貪慾を有し、寂靜を有し、滅を有し、法を有し、菩提を總て成就する善根の聲を生ずべし。

(23) 阿難陀よ、樂有世界に於て不善の名は全くなし。蓋障の聲あることなく、惡趣、惡行に全く墮する聲も亦あることなく、苦の聲もなし。阿難陀よ、かしこには苦も亦なく、不樂受の聲も亦なし。何況哉亦苦と苦の聲あらんや。阿難陀よ、略してこの法門に依てかの世界を樂有と名く、廣說せしには非ず。阿難陀よ、廣說せば、(一)劫波、或は劫波より無盡に至るまで樂有世界の樂の因を總て稱讚すと雖も、尙その樂の諸因の限量を悟ること能はざるべし。

(24) 阿難陀よ、かの樂有世界にあらゆる有情は已に生じ、(現に)生じ、當さに生せんとする(以下原本二九二右)彼等一切は、尙是の如き形、色、力、威力、面積、自在、福聚、諸神通、衣服、裝飾、園林、不思議殿、重閣の總ての諸種の快樂と。是の如き色、聲、香、味、觸との總ての諸種の快樂と、享樂と。是の如き一切の總ての諸快樂を有す。譬は他化自在の諸天の如し。

(25) 阿難陀よ、樂有世界の諸有情は段食と粉食とを食せず。されど是の如き種類の食物を欲せば、是の如き種類の受用を知(感)して身を満足すべし。されど彼等は亦身に投入せず。

(26) 彼等は身を満足し、是の如き香種を欲せば、是の如き天香の種類の一切國を薰すべし。若しかしこに、その香を嗅ぐを欲せざれば、それには亦香匂の想ひに注視さへも起らざるべし。是の如くあるゆる香、華鬘、塗香、抹香、傘蓋、幢、幡、音樂を欲せば、彼等はそれらの是の如き種類に依て佛のかの一切國を徧滿せらるべし、彼等は異名の衣服と云何様なる數百千色の(衣服)を欲せ

ば、是の如き諸寶衣に依て、かの佛の一切國は適滿せられ、身を覆ひたりと自から知るなり。それらは即ち首飾、耳飾、頸飾、手足飾、即ち冠、耳、環、腕飾、臂飾、胸飾、頸飾、耳飾、指印環、金鎖、帶、金綱、眞珠綱(原二九二左本)、一切寶、小鈴綱との如き云何なる飾りを欲せば、是の如き種類の數百千の寶飾に依て飾られたり。即ち(飾られて)寶樹珠に懸りて彼佛國に充滿せるを見るなり。又自らは其等の飾りに依て飾られたるを知るなり。若し彼等は色、相、形、廣さに至るまで種々寶の百千門(天蓋)を以て嚴飾し、天の寶種布を(以て)徧布し、色彩の坐褥を敷ける不思議殿の如きものを欲せば、是の如きそれらの不思議は彼等の前に現せん。彼等はそれらの成就せる不思議殿の内に七々千の天女に圍繞せられつ恭敬せられて住し、戯れ喜びて享樂を行ふなり。

(27) 彼世界には諸の天人の異なるものなし。但し俗語を以て計算せらる(如き)天と人と名くるものを除くなり。阿難陀よ、そは譬は轉輪王の前には賤族と、卑小(族)とは光輝もあらず、照耀もあらず、光澤もあらず、無畏もあらず、光耀もあざざるなり。是の如く諸の他化自在天の前には、又天の帝釋樂も即ち林園、不思議殿、衣服、嚴飾、權力、神通(變化)、神變、自在に於ては光輝もあらず、照耀もあらず、光澤もあらず、法の對觀と、法の全行とを除くなり。阿難陀よ、そは諸の他化自在天は云何に似たるや、それに同じく、この樂有世界の諸人を見るべきなり。

(28) 阿難陀よ、かの樂有世界には午前の時の近づけるととき、普く四方より動搖し、普く動搖する

風は起り、それに依て寶樹林は美麗に、容態は(原 本 二九三右)優雅に、雜色、種色あり、種々芳はしき天の妙香を以て、それらの薰りを放ち、普く放ち、震動し、普く震動し、それより諸種の華は微妙の香を有し、容態美しく、かの大寶地に落つ。それらの華に依て彼佛國を普く人の深さ(身の丈け)約七尋までに散布せらるなり。そは譬は或は人が巧みなる華牀を兩手に展布し、平らかにおかば、極めて美麗にして容態美はしが如し。是の如く其等の香氣と雜(色)を有する華に依て彼佛國を人の深さ(身の丈け)約七尋まで覆はるなり。かの諸種の華は柔輓にして、譬は迦耨隣陀迦(kaṇḍika)の如く、それに觸れば安らかなり。それら(の上に)足を置けば四寸程窪るべし。足を舉げば四寸程揚るべし。午前の時の過ぎ已りては、それらの華は亦殘らず無くなるべし。その次の時の佛國は靜閑、快樂清淨となり、諸の前の華に依て汚さるゝことなかるべし。爾時又普く四方より風起り、凡て前より(説きし)諸の新華を現前に散らすなり。そは應に午前の如く、日中と、午後の時と、夜と初夜と夜中と、後時と曉天とは亦是の如し。かの種々の芳香にて薰せらる諸風は起り、かの諸有情に觸れば、そは即ち比丘が滅盡定に入るが如く、安樂を有すべし。

(29) 阿難陀よ、かの佛國に於ける如來の説話を除き、火、日、月、星、行星、星體、冥、闇の名の施設さへもあることなし。又晝夜の施設さへあることなし。家を總持する想さへもなきなり。

(30) 阿難陀よ、彼の樂有世界には、時々天の香水の雲の雨は現前に降り、天の一切色を有する華、

天の七種寶、天の栴檀の香、粉、天蓋、幢、幡の雨は現に降るなり。尙天の諸蓋も持たれ、天の寶傘と涼しき拂子と共に空に持たれ、亦天の音樂の諸聲も奏せられ、諸天女も亦舞踏するなり^(上卷)。

【譯者云】、西藏譯は梵文と同じく、漢譯の如く上下二卷に區分せられずして連續せり。されど今便宜上漢譯に倣ひ區分して上下二卷とし、以上を上卷とし、此に特に下卷としての題號を附す。

西藏文佛說大無量壽經^(卷下)

(1) 阿難陀よ、彼佛國にあらゆる有情の已に生れ、現に生れ、當に生るべき彼等一切は、涅槃^(Mya-Nan)に至るまで如實^(Yab-Dae)に決定せらるべし。そは何故に言ふや。彼處には即ち不定^(Ma-Nes)と、邪定^(Log-pa-Nid)との二聚^(Phin-po)を全く定め、或は施設することもなければなり。阿難陀よ、略せばこの門^(詳)に由て彼世界を樂有^(De-B)と名けられ、廣^(can)說せしには非ず。阿難陀よ、廣く說かば、劫波を盡くして樂有世界の樂の諸因を總て稱讚すと雖も、その樂の諸因の際限を知ること能はざるなり^(原)^(本)。斯くてその時、世尊はこの偈を告げ給へり。

(一) 一切有情は善逝^(bDe-bur)せば、

勝義^(Don)に熟達し、智は完全清淨にして、

彼等は劫波、或は其上にも、

尙樂有の稱讃を能く宣説すべし。

(二) 讃歎の響、連續を能く宣説するに、

それらの俱胝劫波を盡すといへども、

樂有の讃歎は究竟に到らず、

彼等の辯才も亦盡きざるべし。

(三) 設ひ世界を微塵量に破壊し、

施設 (bTag-sTe) して、塵にせられ、

それよりも多き諸の世界に、

寶を充滿せしめて布施を施すとも。

(四) 設ひ無量光の名號 (Taksana, mTshan) と (以下原本、二九四右)

樂有の諸の勝れたる清淨の功德とを、

聞き已りて歡喜し、合掌するに、

この功德の一分も亦及ばざるなり。

(五) かるが故に、彼の如來の、

功德を聞き已りて、尊敬と信とを生じ、殊勝なる樂有世界まで、

往かんが爲めに強き信解 (Mōs. pa.) を生ず。

(六) 説ひ樂有世界の、

名 (Ama. mi.) を聞けるその功德に於ては、

かの諸の普き廣大な最勝 (人の國の (功德も)、

(尙) 一分と譬喩とにも及ばざるなり。

(七) 凡そ勝者の教令と智慧を有する、

彼等は是れよりも功德多かるべし、

只信は正義を得るが爲めなり、

この故に聞きて疑 (二心) を除くべし。

阿難陀よ、樂有世界の功德と、讚歎とは量りなきなり。

(2) 阿難陀よ、十方の各方に於ける恒伽河の砂量に等しき覺者の國中にある恒伽河の砂量の覺者世尊は、かの無量光如來の名號 (Lakṣmīnīrajanīya) を全く宣説し、讚歎を説き、稱譽を宣揚し、功德を宣説す。

そは何故に云ふや。あらゆる有情の或ものは、彼無量光世尊の名號を聞き、聞き已りて、亦設ひ只

一念發起を思惟し(Semis-Skyed-pa gCig-rtsam)相續するにより、信と歡喜とを發起せば、彼等一切は無上清淨圓滿の菩提より後に退轉せざるなり。

(3) 阿難陀よ、あらゆる有情の或ものは、彼如來を尊敬し、再三念(Vi-d-La Byed)し、多くの善根を無量に發起し、菩提に心を廻向し(bSas)、彼世界に生れんと誓願を投せば、彼等は死の時の近づき住せば、彼無量光如來應供正等覺者は、彼多くの比丘衆に全て圍繞せられつ、前に立ちて住し給ふべし。彼等ほかの無量光世尊を見て至信の心(Rab-Tu Dad-pa-lu Sems)を以て死し、かの樂有世界に生るべし(Skye-Bar)。阿難陀よ、善家の男子、或は善家の女子の或ものは自己(pa)この(現在の)命(Tsal)の間に無量光如來を見んと欲せば、云何に適當に考ふるところのその勇猛心に依て無上正等覺に心を發起し、深き思惟の相續を以て、彼佛國に生れんが爲めに心を清淨に發し、諸善根を發起し、全て廻向せざるべしなり。

(4) 阿難陀よ、又あらゆる有情は亦彼如來を念(Vi-d-La Byed)し、多くの善根を絶へず無量に起さしめ彼佛の國に心を清淨に起さしめば、彼等は死の時の近づくとき、彼無量壽如來應供正等覺者の色と相と(身の)廣とに似たる眷屬の比丘衆に圍繞せられて、諸の化佛は前に住し給ふべし。彼等は如來を見て、至信に(Da-l-pa)意識する(dMigs)三昧と、不忘の念によりて死去して、彼佛國に生すべし。

(Skye-Bar)
(hGyar-Ro)

(5) 阿難陀よ。あらゆる有情は、設ひかの如來を只一念發起(Sems-byi kyed-pag Cig-Tsam)、隨念し、又彼佛國に生れんと欲し(iDud-pa)、諸の深法を説かれたるとき、歡喜を得し、幸福も退かず、惑はず、怯まず、設ひ一心の發起なりとも(梵本)、かの無量光如來を念し(Yid Id Byod)、又欲(願)を發せば、彼等は夢中に彼無量光如來を見て、彼樂有世に生れ、又無上清淨圓滿の菩提より退轉せざるべし(以下原本) (二九五右)。

(6) 阿難陀よ、彼諸如來は、この義(Artha)の力(Dhan)を觀已りて十方の無量無數の世界に於て、彼無量光如來の名號を全く稱讚し、又讚歌を説き、復稱讚を宣説す。阿難陀よ、十方の各方より恒伽河の砂量の(如き)諸菩薩は、かの無量光如來を拜見し、敬禮し、近任し、全問し、かの菩薩の衆と、その諸佛國の完全殊勝なる功德の嚴飾莊嚴を見んが爲めに、かの佛國に往詣するなり。

斯くて爾時世尊はこの義(Don)を廣説し、これらの諸偈を告げ給へり、(目)

(一) 無量光の覺者なる導師に、

敬禮せんが爲めに東(方)の佛國の、

無邊恒伽河の沙量より、

かの諸の圓滿の菩薩は來集す。

(二) 彼等は種々の色ある華、

多く悦はしき芳香の束を把りて、
天と人とに供養せらるゝ無量壽、
最上なる人導師に能く散布す。

(三) 無量光の覺者なる導師を、

敬禮せんが爲めに、是の如く西南と、
北方との云何に多くの諸佛國より、
彼等の圓滿なる菩薩は來集す。

(四) 彼等は種々の色(ある)香、

多くの悦ばしき芳香の束を把りて、
天と人とに供養せらるゝ無量壽、
人の最上なる導師によく散布す。

(五) 彼等の多くの菩薩は、

供養して、かの無量光の足下に、
敬禮し、圍繞して斯く(歎して)、
佛國は美しく驚嘆すべしと云へり。

(六) 歡喜と満足の無比の心を以て、

彼等は華束を散布し、

かの導師の前に於て斯く(願ひて)、

我等の風も亦これに同じからしめよと云へり。

(七) 彼等は華束を把るや否、

その時、百由旬那の傘となり、

よく嚴飾して美しく柄に依て飾られ、

覺者の身を全て覆へり。

(八) 彼等の菩薩は是の如く、

近仕し、歡喜しつゝ斯く言へり。

誰も最勝人の名號(Lakṣaṇa, mTshan.)を聞く、

かの諸の有情は善く利益を得んと。

(九) かの佛國に我等は來集するが故に、

我等は已に利益を能く得たり、

千劫波に於て師に依りて總て成就せられ、

夢の如き國は何に同じきやを見よ。

(十) 光りは無量なり、威徳も無量なり、身命も無量なり、僧伽も無量なり、菩薩に圍繞せられて美麗なる、

最勝完全なる福德覺者を見よと。

(十一) その時、無量壽(尊)は微笑し給ひて、光りを放つこと三十六俱胝にして、それらは口輪より發し、

千俱胝の諸國を覆ひ給ふ。

(十二) かの一切の放光は復た還りて、かの導師の頂髻に沒す。

そのとき放光は沒し了れば、

諸天と人とは歡喜を生ず。

(十三) その時、大名稱ある佛子、

かの觀自在は起立して(問て曰く)、

何が故に世の護主は微笑し給ふや、

世尊よ、かの因と縁とは何ぞや。

(四) 多くの有情の救済者、哀愍者、

かの勝義の賢者よ、願くば授記あれ、

かの最上意悦の説話を聞き已りて、

諸有情は歡喜の心となるべし。

(五) 多くの世界(より)諸有情は、

佛を拜見せんが爲めに、この樂有(國)に來る、

彼等は聞きて大歡喜を生じ、

速かにこの國を完全に見るを得ん。

(六) 又此廣大なる國に來集して、

天眼と、天耳と、

前生の記憶と、最上賢慧と、

神通力とを亦速かに得んと。

(七) 無量壽佛は懸記して(曰)(以下原本、
二九六右)

我は昔の誓願(Smon-Iam)を斯く發せり、

諸の有情は我の名(Nama-Min)を聞かば、

我が國に常に來るべし。

(六) 我はかの善願を成就せしかば、

諸の世界より有情は來る、

彼等は我が國に來集し已りて、

彼等は一生(Skye-Ba-gCig)より退轉せずと。

(七) 是の故に或菩薩は茲に於て、

我が國も亦是と同じからん、

我も亦名號と、音聲と、見とに由て、

多くの有情を度せんこと欲せば。

(八) そは速かに急ぎ、急ぎて、

樂有の世界に去る (Soi) 、

無量光の傍へ去るきて、

千俱胝の佛を供養せよ。

(世) 神通力を以て多くの國に去^ユき、

數俱胝の佛を供養して、

善逝に供養なすといへども、

朝食の間樂有に還すべしと。